

G【幹事会企画セッション】社会思想史研究の系譜学：本学会創設期を振り返る

報告者：安藤隆穂（名古屋大学）・長尾伸一（名古屋大学）

司 会：川出良枝（東京大学）

《安藤会員の報告》

(1)社会思想史学会創設の背景には、1971年に開催された国際18世紀学会（啓蒙思想国際会議）の第3回国際会議（ナンシー）があった。水田洋会員はこの会議に参加し、「アダム・スミスとカラス事件」という報告をした。そして、国際交流と国際学会に連動する思想史の幅広い分野にわたる学会が日本に必要と痛感し、社会思想史学会（1976年）そして日本18世紀学会（1979年）の設立に尽力することになるのである。この国際的学会交流の重要性の自覚の原点には、「思想の国際転位」という水田の方法的意識があったと思われる。それは、ある国や地域で生まれた思想が他圏域で受容される時、そこで思想の解釈と同時に生じる思想の変革（生産）過程に注目することであって、普遍性・類型性・対等性という視点から思想の国際比較を行う場合、思想を受容する側がその「転位」において発揮する思想的優位性を強調することであった。この意味で、水田は、西洋思想史研究を非西洋圏の研究者こそが独自に深めていく可能性に自信を持っていたと思われる。加えて、この時期、水田は自己の研究史におけるルネッサンスを過ごしており、それは、特に、論文「アダム・スミスにおける同感概念の成立」（1968）に表現されていた。水田は、ここで、スミスの同感論（道徳哲学）の核心が、同感する平等な「他人の存在」を意識し行為者が自己規制することにあると読み解き、近代的個人の思想史における平等と他者意識の契機をクローズ・アップしたのである。平等の契機の再認識は近代思想史を社会主義思想史につなぐ展望を開き、「他人の存在」の契機はその概念を女性、非西欧としてのアジア、宗教、階級的他者を視野に入れ具体化していくことを通して近代思想史の国際的研究を豊かにしたと思われる。実際、水田は、国際学会での報告で、スミスの道徳哲学を初期社会主義につなぎ、衝撃を与えたのである。

(2)社会思想史学会の「創立趣旨」（水田執筆）は、学会の特色として「インターディシプリナリ」を実現するという目的を掲げている。この言葉に焦点を絞り、創設時の学会と水田代表幹事の担おうとした課題について、①学会誌『社会思想史研究』創刊期の「シンポジウム」記事、②同時期における学問領域とアカデミック諸制度の変化状況、③当時の思想史研究の動向、以上の三つの側面から推察してみたい。

①学会創設時期の共通論題（「シンポジウム」）の問題意識

第1回から第4回大会の「シンポジウム」のそれぞれの主題を思い切って一言に集約すれば、「マルクス主義と近代の再考」ということになるだろう。マルクスと社会主義の思想的再検証、近代とその思想像の変化、現代思想という思想史的磁場の登場などを主軸論点に、社会思想史の方法的問い直しが行われていたのである。そして、背景には、民衆思想史、女

性解放思想史、社会史などの新分野の登場によって、運動史と思想史の関係、国家と社会の関係、アジアや日本という地域の思想史的位相などについての見直しが求められていたといふことがある。また、記憶を含む記録の復元をめぐる研究資料への接近方法の問い直しなどの基本問題も提起されていた。

②学会創設期の学問領域の変動とアカデミック諸制度の動揺

戦後学問体制が成立し、専門諸分野の分業的發展が緒についた時、社会思想史は主に新制大学で講義科目とされた。教養課程の基礎として新興社会諸科学の基礎理論科目となることが期待されたのである。その意味で、戦後成立した学問の自治のもとで、社会思想史は、研究と教育をつなぐ意味でも、国家と社会の対時的関係、学問と社会（および運動）の連携、専門研究と民間の学問との対等的連帯などを発展させるうえで、学問全体を支える要の役割を担ったのである。学生の自治活動が盛んであり、社会運動および民間の知的動向と大学の学問とが緊密に結びついていた。また、学問の発信においても、大学の「紀要」類、学術総合誌、全集、文庫、新書類によって、広範囲の媒体が発展していた。

学会創設の時代には、以上のような戦後学問の自治体制と諸制度は、1968年の世界的学生騒乱に象徴されるように、大きく揺らぎ、混迷を深めていた。新しい学問課題と専門分野の出現による学問分業体制の混迷、学問と社会（運動）との乖離、ジャーナリズムの位相変化などによって、学問の共同の理念や総合性は見失われていた。このような中で、大学および民間の学問の諸分野から、それぞれの固有の（社会）思想史の方法とその成果とを持ちより、それらの相互緊張によって、「社会思想史」の再創発を図り、社会の諸科学の基礎理論としての復権を目指すこと、これが、学会創設時「インターディシプリナリ」の言葉に込められた意味であったと考える。

③当時の学問状況と代表幹事水田洋

日本の社会思想史が直面した課題は世界共時的でもあった。日本での学問動向としては、マルクス主義と近代像の再検証を焦点として、前近代論の見直し、共同体論争の再燃、日本近代化論の展開、プラグマティズム論の隆盛などの流れがあった。海外では、ニューレフト、フランクフルト学派、西欧マルクス主義などに代表される現代思想の活発な活動や、修正主義歴史学、社会史、思想の系譜学、社会システム論などの興隆がみられた。そして自然科学では社会工学や生命科学などが優勢となって、内外で共時的に、諸学問の新体系化が模索されていたのである。このような状況の中で、創設時社会思想史学会は、社会諸科学の基礎理論としての役割の復権を目指していた。そして、マルクス主義と近代像の再認識を軸に方法的再検証を行なう学会の方向は、初代代表幹事水田の思想史研究の目指すものでもあった。水田は、この時期、先に述べた「思想の国際転移」の方法によって、近代思想史研究の射程を拡大しながら、社会主義思想史の書き直しや女性解放思想史の導入を図り、独自の「社会思想史」の新構想に着手しようとしていたのである。

《長尾会員の報告》

これまでヨーロッパ史において「啓蒙」は18世紀という過去のものとしてされてきたが、近年では啓蒙思想は時代と担い手を変えながら伝播し変貌していくプロセスであり、運動であり、中心のない波動であると捉えられている。それはまた「近代」を育くみながら「近代」をも超える波動である。それは『啓蒙思想の百科事典』の項目を見て頂くとわかる。第4部「19世紀の啓蒙」では日本、中国、近代朝鮮、アフリカでの啓蒙が取り上げられ、第5部「現代と啓蒙」では「啓蒙の弁証法」そしてフーコー、ハーバーマース、再帰的近代化、ポストモダンと啓蒙が言及されている。このような啓蒙思想のグローバルな展開のなかで、社会思想史は形成された。日本の場合、近代を目指しつつもそれをも超える視座を提供したのは、コミンテルンの三二年テーゼであった。これは、現状を近代以前の絶対主義と規定し、ブルジョア民主主義革命によってまずは近代を目指すものであった。近代をすでに達成したヨーロッパでは、それを育んだ啓蒙思想は現在に通じる過去だが、日本における啓蒙思想は、現在から近代という未来を展望することだったのである。水田洋氏によれば、マルクス思想研究が禁止された後も、戦前の日本では可能な範囲でヨーロッパ近代思想、つまり啓蒙思想の研究がなされたという。このような啓蒙思想の伝播の波動を具現したものが社会思想史である。

《会場から出た質問》

隠岐さや香会員より、社会思想史という科目の成立過程についての質問が出された。社会思想史は先立つディシプリンに対応して成立した学問領域というよりも、まずは科目（講義）名として存在するようになったと思われるが、では、この科目（講義）を最初に設置したのはどこの大学で、その経緯と目的はどのようなものだったのか、という質問である。これに対して、安藤会員、長尾会員ともに、はっきりした答えが出せないということだった。しかし、京都学派を研究している渡辺恭彦会員から、京都大学では戦前から社会思想史という講義が存在する、という発言があった。